

セーラー服と長澤まさみ。／別冊付録 美しくなければ、車じゃない。

JAPAN

December  
2006 No.43  
¥580

12

ビジネスマンのための超簡単「脳トレ」。

「茶道×シングルモルト」の集いが  
ビジネスセレブに流行中!?

機能派ビジネスシューズ20選。

ソフトバンクのキーパーソンが語る  
孫正義のビジネススタイル。

# クリント・イーストウッドが選んだ 5人のニッポン男児。

もう中古住宅とは呼ばないで。  
あの建築家の「ヴィンテージ住宅」

ADAM'S TRIAL VOL.3

## ロスでの生活に戻ったアダムが語る、 益子での登り窯体験。

Portrait & Text: Aya Muto Photos: ©Atwater Pottery

益子での初の登り窯体験という一大プロジェクトを終えたアダム・シルヴァーマン。今回のチャレンジが彼にとってどんな意味をもっていったのか、ロスのスタジオで話を聞いた。——5月と7月、2度にわたり益子へ行ったプロジェクトでしたが、終えてみての感想は？

**アダム** 益子の土や釉薬の種類とい



益子制作の器に入った「鉄」印。アダム特有のフォルムに益子の釉薬が映える。硝子と黒釉の組み合わせでつくられた対作品も写真奥に見える。黒出しの蓋状、海苔中の図。

った材料的なことや薪窯の焚き方はとても勉強になったし、何よりロスのスタジオとはまったく違う環境や方法で作陶する経験は、僕にとってかけがえのないものだった。粘土を唯一の共通語に、異文化の地でいるいる人たちと一緒に作業するのは、実に素晴らしい経験だったよ。

——登り窯から出てきた器については、どう感じましたか？

**アダム** 窯を開くときの、あの期待と不安の入り交じった高揚感、忘れられない。気に入ったものは記念に家に持ち帰ったよ。緑白のボウルの1つに、おそらく火が強くあたったんだろうね、面白いアクセントのついている器があったんだ。それに



登り窯の面白味は受け入れられる赤松薪の灰が、窯の中を自由に移動する火によってさまざまな表情が生まれること。この面白のボウルには灰のアクセントと黒入が見られる。



こちらは鉄釉と黒釉をかけ合わせた花瓶。灰をかぶった部分が緑色になっている。「賞賛の記念にいい結果のもの」と贈られたこの作品は、陶芸家の伝説に書かれた。

鉄釉と黒釉の花器に灰がかかったものや、素焼き前に白泥を掛けて全体にヒビ模様の入った花器も良かった。でも一番のお気に入り、緑白が陶板につくつかないかぎりぎりのところで造形した花器。あれは本当に運が味方してくれた。

——日本以外の土地でも作陶してみたいですか？

**アダム** 家族やロスのスタジオのこ

**Adam Silverman**

建築家、洋服ブランドX-LARGEの共同創業者などを経て、2003年よりAtwater PotteryとしてLAで陶芸活動に専念。日本での注ぎ窯も高く、7月に東京のPlaymountain VILLAで展覧が開かれたばかりだが、現在もTKG Editionsにて展覧を展覧中。また2007年4月14日から益子のSTARNET ZONEでの展覧が決定。www.atwaterpottery.com



5月に窯で焼いた作品のうち数点は白泥を塗ってから素焼きされた。益子と呼ばれる透明釉をその上に掛け、窯の中に、土の反応は引く引かれ、美しいヒビ模様が入る。

くして工房で作業を開始し、鳥が起きだす様子に耳を澄ます。そして薪が燃える匂いを感じ、勢いづく火に薪をくべ続けるという行為を通して、器に息吹を吹き込む窯焚き。

機会あって閑沢窯のような素晴らしい場所に行くことができ、そこで彼らと一緒に作陶できたことは、自分にとって、とても特別なことだったと思っている。時間と知識を窯焚きに注ぎ込んで、特別な何かを積極的に分かち合おうとする彼らの心優しい姿勢に、僕はホントに勇気づけられたんだ。

——では最後に、益子に戻ってやりたいことがあれば。

**アダム** 時間が許せばまた登り窯に挑戦したい。今度は白泥の釉薬と緑白に集中してやってみよう。それから灰がたっぷりかかる穴窯もやっ



今回の窯出し一番のお気に入り。釉薬が垂れ、絶妙なバランスで造ったような造形を作っている。他よりも多く黒白が掛けられたこの花器をアダムは窯のマジック、と喜んだ。

てみたい。穴窯というのは、窯の中の灰が釉薬代わりになるんだけど、すごく乾いた仕上がりになるんだよ。あと、もっといろんな人にも会いたいし……、やりたいことを言いだしたら夜が明けちゃうよ(笑)。

とを考えると簡単には踏み切れないけれど、東海岸のニューイングランドやノースカロライナ、それにスペインやフランス、イギリスにも優れた陶芸家がある。世界には、まだまだ陶芸ゆかりの町がたくさんあるんだ。例えば、1940年代にピカソが制作の場に選んで有名になった南仏のヴァラウリスだって、もともと陶芸の町だった土地だしね。もちろん日本にもまた、作陶しに行きたいよ。数年に一度、こういうプロジェクトができれば理想的だね。

——今回、益子で得たものは？

**アダム** どう言えばいいだろう。とにかく益子はいいところだったし、そこで経験したすべてが僕にとっては宝物なんだ……。日の出の頃、農民が田んぼに出かけるのと時を同じ